

新太郎君に期待する

高部英明

阪神大震災では、政府の対応で「危機管理」が問われた。上智大のクラーク教授が「危機管理という言葉が流行しているが、それ以前に危機意識を持つことが重要だ。日本人は不思議なくらい危機意識が薄い。想像力がないのです（3/1朝日天声人語より）と指摘している。地震以前から「日本の危機」が声高く議論されてきている。バブルの崩壊に象徴されたように、これまでの社会や企業の体質では、これからの世界に対応できない。日本的価値観の変化が迫られているのです。

年末、NHKで「激動！貴方の職場はこう変わる」という放送があった。その2回目放送の副題は「人事崩壊がやってくる」でした。昨年あたりからほとんどの企業の人事部長は「年功序列は崩れる」と思い始めている。年功序列は企業が発展し続けている時（つまりパイが大きくなっているとき）は機能するが、これからの日本経済では維持できない。従って、制度自体変わらざるを得ない、というものです。これからどう変わるのかについて番組では、これまでの価値観をもったお父さん「太郎さん」と、新しい価値観をもった息子の「新太郎君」がアニメで現れ、互いの価値観を説明した。太郎さんの行動規範は(1)責任感、(2)安定性、(3)協調性、(4)会社を大切にす、であるのに対し、新太郎君は(1)自由、(2)変化を恐れない、(3)独自性、(4)会社を利用するぐらいの気持ち、と変わる。

レーザー研も「危機」が叫ばれて久しい。従来の発想から抜けきれず、希望的観測が先行してしまい、果して想像力を持って危機に対処してきたか、と問われると、自分自身まだ危機意識が希薄であると反省している。

レーザー研発足から23年。初期の目標に向かって皆が邁進してきたのは世間が認める所です。ところが、23年たってレーザー核融合を取り巻く世界も大いに変化しました。私に関連する分野では天体、流体、原子の物理そして数値計算技法などで目を見張る進歩を遂げました。大切なことは、レーザー核融合20年の歴史を客観的、学問的に評価し、また反省もし、回りの世界の変化を冷静に分析し、必要なものは取込み、第三者の評価に耐え得る普遍的な価値を、研究を通して生み出して行くことです。レーザー核融合だけの価値観に閉じこもっていたのでは古代の文明が亡びて行ったと同じ道を歩むだけです。

文明は異なる文明と融合することにより発展してきたことは歴史の教えるところです。その時、文明が飲み込まれるか、飲み込むかは、レーザー核融合という文明とそれを担う人材の質によるのです。こらからの発展は「変化を恐れない」たくましい研究者・学生の個人としての能力に負うところ大と思います。自分なりの研究理念を持ちレーザー研という環境を大いに利用して各人が努力すれば、必ずやこの「危機」は乗切れると思う次第です。